九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[132]語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/6617885

出版情報：語文研究. 132, 2021-12-17. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

筑紫日本語研究会　編

『筑紫語学論叢Ⅲ
――日本語の構造と変化――』

本書は、筑紫日本語研究会の四十周年、ならびに高山倫明先生・木部暢子先生のご退職を記念して編んだ論文集である。副題には、「構造」と「変化」という日本語研究における重要なキーワードを掲げる。論文タイトルは以下の通り。

日本語使役文の用法と歴史的変化　青木博史
終助詞「なむ」小考　森脇茂秀
中古散文における「連体形＋ゾ」文の用法
――ノダ文・連体ナリ文との共通点と相違点――　勝又　隆
『上井覚兼日記』における「被賜・被給」をめぐって　堀畑正臣
中世室町期の注釈書における「～トナリ」の用法　山本佐和子
洒落本における不定の「ぞ」「やら」「か」　川瀬　卓
ソコソコの語史　清田朗裕
「ワル（悪）＋形容詞」の消長
――形容詞語形成の観点から――　村山実和子
愛媛県宇和島市三間町毛利家の角筆文献と漢詩学習
――写本『三體詩　中』を資料として――　西村浩子
昭和初期、福岡県直方の方言矯正書二種　岡島昭浩
北琉球語喜界島方言の授与動詞　荻野千砂子
佐賀東部方言の条件節における準体形式「ト」の挿入
――時制節性からみた条件表現の体系についての一考察――　有田節子
九州方言の動詞タ形・テ形に起こる音便現象の対応関係：
予備的考察　有元光彦
天草諸方言における音調型と複合名詞アクセントの中和　松浦年男
出雲方言アクセントの分布と歴史
――2拍名詞4類と5類のアクセントをめぐって――　平子達也
ロシア資料と上代特殊仮名遣エ列音――下二段動詞の場合――　江口泰生
鹿児島方言における対格標示の条件
――ロシア資料と近代談話の比較から――　久保薗愛
長崎方言の終助詞バイの変遷について
――近世近代の長崎史料を中心に――　前田桂子
大正10年『読売新聞』の日本語関連記事について
――「新聞記事データベース」活用の一例として――　新野直哉

連体修飾節と被修飾名詞の関係
――スケールを表す被修飾名詞に着目して――　東寺祐亮

間接疑問文発達の一過程――日本語史を中心に――　衣畑智秀

本学会員である、青木博史氏、森脇茂秀氏、川瀬卓氏、村山実和子氏、岡島昭浩氏、荻野千砂子氏、江口泰生氏、久保薗愛氏、前田桂子氏が名を連ねている。以下に本会員の論考を簡単に紹介する。

青木氏は、日本語使役文について上代から通時的に観察し、「許容」用法や「尊敬」用法の派生、また「非情の使役」について分析する。森脇氏は、希望表現形式である終助詞「なむ」について、上代から中古にかけて考察し、「なむ」が和歌中に用いられる用法が多く、動作の実現は人為の及ばないものが多いことなどを指摘する。川瀬氏は、上方洒落本と江戸洒落本において、不定の助詞「ぞ」が共通して用いられる一方で「やら」と「か」の使用において偏りが見られることなどを指摘する。村山氏は、「ワル＋形容詞」について、程度的な意味の発生を形容詞の連用修飾用法によるものとし、「ワル」を形容詞由来の接頭辞であると指摘する。

岡島氏は、福岡県直方市（旧鞍手郡）でつくられた『方言矯正の手引』『方言矯正手帳』を紹介し、方言の変化、捉えられ方などを知るための資料である方言書が散逸しないように心がけるべきであると述べる。荻野氏は、北琉球語喜界島方言の授与動詞の観察により、北琉球語と南琉球語に言語地理学的に酷似した敬語が存在することを示し、また喜界島方言の授与動詞の体系を記述する。江口氏は、下二段動詞がなぜエ列乙類であったのかということについて、十八世紀のロシア資料と上代特殊仮名遣のエ列音の対立を足掛かりにして論じる。久保薗氏は、十八世紀のロシア資料と近現代の談話における対格標示を比較し名詞の有生性や隣接性の観点から両者の共通性を指摘する。前田氏は、現代九州の代表的方言である「バイ」を近世近代の長崎方言を反映した文献資料から通時的に観察し、その一連の形式の変遷を記述する。

本書には、これら本会員による論考に加えて十二本の論文が収められている。古典語や現代語、方言など様々な観点から「日本語の構造と変化」を論じており、新たな視点を得る一助となるであろう。

（令和三年三月　風間書房　A5判　五二〇頁　一三、〇〇〇円＋税）

ロバート　キャンベル　編著
『日本古典と感染症』

本書は、「感染症」をテーマとして、上代から近代に至るま

での日本文学・文藝と疫病との関わりについての論をまとめて刊行されたものである。本書の構成は以下の通り。

感染症で繋げる日本文学の歴史　ロバート　キャンベル
『万葉集』と天平の天然痘大流行　品田悦一
平安時代物語・日記文学と感染症
――虚構による「神業」の昇華　岡田貴憲
『方丈記』「養和の飢饉」に見る疫病と祈り　木下華子
神々の胸ぐらを摑んで――感染症と荒ぶる禅僧のイメージ
ディディエ・ダヴァン
流言蜚語と古典文学――鬼・髪切虫・大地震　川平敏文
中世の文芸と感染症　海野圭介
江戸時代の漢詩文と感染症　山本嘉孝
養生の基底にある思想――『延寿撮要』から『養生訓』へ
入口敦志
伝奇小説の中の疫鬼たち　木越俊介
〈病〉と向き合う村びとたちの知恵――ある山村の日記から
太田尚宏
安政のコレラ流行と歌舞伎　日置貴之
幕末役者見立絵と感染症　高橋則子
コレラと幕末戯作　山本和明
近代小説と感染症――柳浪・漱石・鷗外から　野網摩利子

紙幅の都合上、各論をすべて紹介することはできないため、いくつかの論を抜粋して紹介する。

まず、ロバート　キャンベル氏の論は、「災害」と「疫病」との関係性、日本の歴史を動かしたり、文学を誕生・展開させたりする端緒としての「疫病」について述べる。それだけではなく、本書の総論に位置する論であり、以降の論への理解の助けとなろう。

次に、岡田貴憲氏の論は、「感染症」によって恋人や知人を失った経験が『和泉式部日記』『更級日記』を書くための母胎となったこと、『源氏物語』『狭衣物語』の物語展開の仕組みとして「感染症」が機能していることを述べる。そして平安時代の物語・日記文学が、「感染症」に苦しめられた体験を虚構に活かすことでその恐怖などを緩和・超克しようとする、「感染症」との共存に向けた文化知を尽くした営為であったとする。

続いて、川平敏文氏の論は、新型コロナウイルス蔓延に伴う様々なデマの流布と類似する前近代の事例を述べ、そのような「流言蜚語」が描かれた作品から古人がいかなる教訓を得たかについて論じる。そこでは、デマに惑わされないためには教育に裏打ちされた知識が必要という、現代と通ずる面が説かれている。

最後に、入口敦志氏の論は、江戸時代における〈養生〉について、『延寿撮要』と『養生訓』に注目し、〈養生〉がいか

に広まったか、〈養生〉の基底にいかなる思想があったかを述べる。そして、『養生訓』では『延寿撮要』には見られなかった〈徳目〉としての〈養生〉が説かれており、それが現代の思想の基底につながる可能性を指摘する。

世界中で新型コロナウイルスの爆発的な流行を迎えてから、世間の「感染症」に対する関心は高まっているだろう。天然痘をはじめとして、古来さまざまな疫病が世界を襲った。その様子は日本文学の中でも描かれており、医療技術が現代ほど進歩していなかった時代において、疫病はきわめて脅威的なものとして受け止められていた。そのような状況下で、当時の人々はどのように疫病と対峙していたのか。本書を読むことで各時代の疫病への意識や対応方法を広く見渡すことができる。

新型コロナウイルスによる「感染症」の危機に晒されている現代、我々の祖先から学びうることは多いはずである。本書はそのための一助となるに違いない。

（令和三年三月　KADOKAWA　A6判　三二七頁　九二〇円＋税）